

GSC020-12

会場: 101

時間: 5月23日16:18-16:30

能登スタディ・ツアー

Study Tour of Noto

平松 良浩^{1*}, 田中純一²

Yoshihiro Hiramatsu^{1*}, Junichi Tanaka²

¹金沢大学理工研究域自然システム学系, ²金沢大学人間社会研究域法学系

¹School of Natural System, College of Sci, ²School of Law, College of Human and Soci

金沢大学能登半島地震学術調査部会では、平成19年3月25日に発生した能登半島地震の自然科学的な背景や奥能登の生活の場のより深い理解や課題発掘のために、現地におけるフィールド学習として一般市民を対象とした計3回のスタディ・ツアーを開催した。本報告では、このスタディ・ツアーの内容について紹介する。

第1回ツアー「奥能登の景勝地から地震に迫る」では、総持寺やヤセの断崖などの能登半島の観光地を巡りながら、一千万年に及ぶ地学的な能登半島の形成史と照らし合わせ、能登半島地震の発生メカニズムや地震被害及びそれらと景勝地の地形や地質の関係等について学習した。第2回ツアー「農林業の現状とバイオマスの可能性」は、奥能登農林業の現状と将来可能性についての理解を深める内容である。過疎・高齢化の厳しい現状の中での農林業振興支援の現況の解説、NEDOバイオマスプラントやバイオメタン発酵施設の見学、ブランド米販売やユニークな祭で地域興しに取り組んでいる輪島市金蔵地区の視察を行った。第3回ツアー「復興に向けた能登コミュニティの潜在力」では、能登半島地震発生時に短時間で要援護者安否確認を可能にした「見守りマップ」について作成担当者から話を伺いながら、自助・共助・公助のあり方について意見交換を行った。また、土蔵修復現場などを見学しながら、地震によって大きな被害を受けた土蔵が、湿度や温度管理において輪島塗を支える重要な役割を担っていることを学習した。ツアー参加者の標準的な感想として、普段何気なく目にしていた能登の自然風景の中に地震に関連したものが多くあること、普段生活している土地がどのようにできたかということと地震の被害が関係していること等、今まで気づかなかったことに気づいた点や、被災者や被災地住民と直接話し合うことができた点などを評価する意見が多く見られた。

キーワード: 能登, 能登半島地震, フィールド学習, 復興

Keywords: Noto, the 2007 Noto Hanto earthquake, field learning, reconstruction